令和６年11月１日発行（毎月１日発行）

2024.11
（公社）富山県薬剤師会
広報誌

とみやく 富薬

11号
第46巻
No.424

シクンシ *Quisqualis indica* L.　（シクンシ科 *Combretaceae*）

生　薬　シクンシ（使君子）　種子が成熟し、果皮が紫黒色になる秋に摘み取り、陽乾する。

成　分　アミノ酸：quisqualic acid、脂肪酸：citric acid, malic acid, oleanic acid, palmitic acid、ステロール：phytosterol、アルカロイド：trigonelline 等。

効　能　駆虫薬、健胃薬として回虫・蟯虫駆除、腹痛、消化不良、下痢などに応用する。漢方処方肥児丸に配合される。

元富山県薬事研究所
薬用植物指導センター
村上守一氏　写真撮影

○○表紙について○○

インド南部、ミャンマー、マレー半島、ニューギニアなど熱帯から亜熱帯地域原産の常緑木本性のつる植物で、種小名の「indica」は、「インドの」という意味で産地を表しています。また、英名で「Rangoon creeper」と呼ばれ、ミャンマーの旧首都「ラングーン（ヤンゴン）のつる植物」という意味で、やはり産地名です。中国でも、西南部の四川、広西、広東省などで栽培され、『開宝本草』(973－974）に「俗間の言伝えに、潘州（広東省）の郭使君が小兒の病を治療するに多くこの物を獨用したので、後世の医家がそれに因って使君子と呼ぶようになったのだ」とあり、また和名は漢名の音読みで「シクンシ」と呼ばれるようになりました。

「シクンシ」は、つる植物ですが、はじめは低木状で、後につる状になります。つるは丈夫で、８ｍ以上に伸びることもあり、他の植物によくからみつきます。日当たりのよい山の斜面や低木の茂み、水辺などを好んで生育します。花が美しく、熱帯では庭の花木としてよく植えられています。葉は対生または部分的に互生し、葉柄は長さ１－２cmで、葉身は紙質で薄く、長さ７－14cmの楕円形です。葉柄の下部に関節があり、葉が落ちると残った葉柄の一部は刺状の突起となって残ります。熱帯では年間を通じて開花しますが日本の温室では５－９月の夏の熱い時期に開花します。短い穂状の花序に芳香のある多数の花をつけます。花の大きさは径２－４cmで、花弁は５枚、長さ４－７cmの細長い管状の萼筒があります。このため、花が下向きに垂れさがるように咲きます。花の色は、開きはじめは白色で、その後、ピンクから紅色に変化します。果実は、長さ２－３cmの紡錘形で、縦の稜が５本あり、熟すと、やや木化して暗褐色になります。果実の中には、種子が１個含まれています。

中国においては『南方草木状』(西晋265－316）に「これを留求子といい、嬰孺の疾を療ずとある。これで見ると魏（220－265)、晋（265－420）時代から已(すでに)用いられたもので、ただ名称が異うだけである」と言っていることから、かなり古くから用いられていたようです。前出の『開宝本草』にも「小兒の五疳、小便白濁。蟲を殺し、瀉痢を療ず」と、駆虫(くちゅう)薬として使うことが書かれています。『本草綱目』(1578）には詳しく「海南地方、交趾(こうし)（ベトナム）易く、その藤は葛のように樹に搦まって上に伸び、葉は青くして五加（ウコギ*Eleutherococcus sieboldianus*）の葉のようだ。五月花を開く。この花は一簇に葩(はなびら)が二十ほどあり、色紅く、輕盈で海棠（*Malus holliana*）のようだ。実は長さ一寸ばかりで五辨合して稜があり、はじめは半ば黄色だが老いると紫黒色になる。その中に仁は長くして榧（*Torrey nucifera*）仁のよう、色と味とは栗（*Castanea crenata*）のようだ。久しく置けば油が黒くなって用いられない」と、また「凡そ蟲を殺す薬は多くは苦く辛いものだが、使君子、榧子は甘くて蟲を殺す点が異なっている。凡そ大人、小兒の蟲ある病には、ただ毎月上旬、早朝空腹の時に使君子仁数個を食い、或は殻の煎湯で嚥下せば、翌日蟲みな死んで出るものだ。……この物は、味は甘く気は温であってよく蟲を殺すと同時に脾、胃を益するものだ。故にその結果はよく虚熱を斂(おさ)めて瀉痢を止める。小兒の緒病の要薬だ」と言っています。

日本への渡来は『用薬須知』(1726）に「使君子　漢より来るものは只一種あるのみ、眞なり。和之無」とあり、『物類品隲』(1763）にも「使君子　漢種、上品、享保中(1716－1736)、種を伝て駿府官園に植える。今、甚だ繁茂す。毎年実を東都に貢ず。然れども官禁厳にして外人見ることを得ず。己卯年、長崎山本利源治、漢種一根を田村先生に贈る。其後亦漢産の実を植て生ずることを得たり」とあり、実際には江戸中期頃と推測されています。『本草綱目啓蒙(むもう)』(1803）にも同様のことが記され、かつ「甚、寒気を畏る。故に冬月、土窩中に入れ、善養うて、大木なるものは花を開く。実を結べども熟し難し。駿州、尾州、紀州等の暖地にては年年多く花実をなす」と、暖地での栽培に成功していたことが記されています。　　（村上守一　記）